

鬼道衆最強、のんびり鬼道長さん

もちふじ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——鬼道衆。

それは『隠密機動』や『護廷十三隊』と共に実行部隊の一つである。鬼道に秀でた者で構成される特殊部隊。

当代の鬼道衆総帥、鬼道長である青年は持ち前のマイペースさでのんびりと生きていく。

歴代最強、鬼道長の物語。始まり、始まり。

目
次

鬼道長の彼	
蝶の知らせ	
犬猿の二人	
鬼道衆と書き、大家族と読む	
それぞれの思惑	
それは彼なりの	
天に立つ	
斯くして戻る日常	
空のベッド	

49 41 29 22 13 10 6 4 1

鬼道長の彼

——鬼道衆大鬼道長、『九花嚴』
いちじくかざり

歴代最強とまで言われる鬼道の使い手であり、死神ながら斬魄刀を所有していない異端児。

曰く、鬼道のみで卍解時の隊長格と渡り合える程の実力者。

曰く、彼の歩いた道には屍しか残らない。

・・・・・これは流石に冗談だろう。冗談だと思う。冗談だよね？

ともかく、本日づけで噂の鬼道長の部下、鬼道衆に配属される身としては、そんな冗談みたいな噂すら恐ろしく感じた。

緊張でガツチガチになりながら部屋に入ったところ、どうやら彼は散歩に出ているらしく。借りてきた猫よろしく、ビクビクと震えながら。入れてもらつた緑茶を啜り、しつかり舌を火傷して。

もうどうにでもなれど、これから先輩になるだろう女性隊員に話しかけた。

以下はそんなモブ子が手に入れた、九花嚴という青年の情報である。

「——鬼道長について教えて欲しい？」

優しげな女性隊員は悩む。

「うーん、なんか妖精みたいな人かなあ。……あつ、いやいやこれは馬鹿にしてたり、ふざけて言つてる訳じやないんだよ。なんか常に三センチくらい浮いてる感じっていうか・・・浮世離れしてるっていうのかな」

大柄な男性隊員は言う。

「優しい人だよ。まあ、ちょっと変わつてるところはあるけど・・・。

鬼道の教え方も上手だし、俺が鬼道衆に居れるのもほとんどあの人のお蔭だしね」

目つきの悪い古参の隊員は語る。

「べつに、そんなにビビんなくたつて化け物じやあるまいし。ふ

つーの人よ。ふつーの近所のお兄さんって感じ。和菓子と散歩と、あと昼寝が好きね。・・ああそれから、『鬼道長』じゃなくて名前で呼んであげるといいわ。その方が喜ぶから」

「実際、私もここに来る時までは結構怖い人かと思つてたんだけどね」「会つてみれば、ただの間抜けな人だよなあ」

「この前なんて寝惚けて歩いて、すっ転んでたわよ。ほんと困つちやう」

そんなふうに茶菓子を摘みつつ、話し合つている時。モブ子が、もしや彼はそこまで怖い人ではないのかかもしれないと思つた時。

ガチヤリと扉が開いた。

「何でしよう、みんなでぼくの悪口大会でもやつてるんで？」

黒い着物姿の青年が部屋に入ってきた。

色白な肌に藍色の髪。金色の双眸は眠たげな半眼で、だらしなく肩に掛けられた藍染の羽織。

・・・なんだろう、本当に近所のお兄さんという感じだ。

まさか、これが鬼道長ではあるまい。あまりにものんびりしそぎだ。強者特有のオーラというものがまるでない。

「あ、花巻さん。おかえりなさい」

「そこに置いてあるおはぎ、美味しかったから食べてどうぞ。お茶入れます?」

「花巻さん、アタシの髪ゴム知らない? 昨日からないのよねえ」

鬼道長の名前は『花巻』だつた氣がするが、人違いだろう。きっとそうだ。いくらなんでもこれはない。

青年は餡子のおはぎをそもそもと頬張りながら、視線をモブ子へと向けた。

「そんで、そちらさんは?」

「ほら、新しくここに来るつていう新入りさんですよ」

「あー。そんな話もあつたような、なかつたような」

彼はうんうん、と適当に頷いてお茶を啜つた。「あつづ」と自分と同

じょうに舌を火傷させて皆から心配されている。モブ子も同じことをやらかしたとはいえ、客観的に見るとかなり間抜けだ。これはいよいよ人違いであろう。

一息ついてから、青年はのんびりと緩慢な動きで手を差し出し、へにやりと笑う。

「ほかあ、九花嚴^{いちじく}_{かざり}つてえいいますわ。一応は鬼道長つて役職についてるんで・・・ま、仲良くなしてくださいや」

反射的に彼の手を握つて、握手する。

——どうやら、このフワフワしたのが噂の当代鬼道長らしい。
・・・・・嘘だろ、世も末だなおい。

蝶の知らせ

——本来、鬼道衆と護廷十三隊は同じ死神ではあるものの、まったく別の組織であり、鬼道衆が護廷十三隊に手を貸すこともその逆のことも滅多には起こらない。

とはいえ、先代の鬼道長とは違い、表舞台にもよく顔を出す花巻と護廷十三隊の仲は、案外悪くない。先日も八番隊隊長の京楽春水と十三番隊隊長の浮竹十四郎と花札をしてきた。

もつとも、これは九花巻個人としての関わりであり、鬼道長としての花巻と彼らの関わりがある訳では無い。無論、それは鬼道衆全員にも言えたことである。

冒頭にも述べたが、やはり鬼道衆が護廷十三隊に手を貸すことなど滅多に起こらないのだ。

だと言うのに、護廷十三隊で使われる伝令役の闇色をした蝶——地獄蝶が花巻のもとへ飛んできただということは、「その滅多が起きたんでしょうなあ」

つい先程まで布団でぐつすりと昼寝をしていた花巻は、地獄蝶の存在に気づいてゆっくりと身体を起こした。

欠伸を噛み殺しつつ、地獄蝶に向けてひょろりとした腕を伸ばすと、花巻の白い指先に蝶がとまる。

「ふむふむ。え？……そりやあ、困ったことになりましたなあ」

地獄蝶から伝えられた内容は、大きく分けて三つ。

人間に死神の力を譲渡するという、重罪を犯した朽木ルキアの処刑。

彼女の処刑を阻止しようと、尸魂界内に複数の侵入者が現れ、今を交戦中の者がいること。

そして――、

「ぼくが隊首会に参加、ですか」

護廷十三隊の隊長のみで行われる会議に、鬼道長である花巻が参加するとは、事態は余程大事おおごとなのか。侵入者くらい彼らだけで何とか出

来るのでは。様々な思いを胸に秘め、億劫そうに立ち上がる。

どちらにせよ、死神の処刑には鬼道長が立ち会わなくてはいけない決まりなのだ。遅かれ早かれ、ここを出なければならぬ。それに、遅れて怒られても気分が悪い。

「いやまつたく、何が起こっているのやう」

「あれ、花巻さん起きられたんですか？おはようござります。……せつかくマジックペン持ってきたのに、落書き出来なくなつちゃつた」

「……マジックペンについては、後でじっくりお話し合いするとして。緑、ちよお、頼まれ事してもらえますかい」

緑、と呼ばれた右手にマジックペンの少女——本名は緑川冴子といふ——は彼の言葉にきよとん、と小首を傾げる。

「頼まれ事、ですか？それは勿論構いませんけど……。あ！ウサギ飛びで瀬靈廷一周しろとかは無理ですよ！」

「誰がそんな体育会系的な頼み事するんでしようや……。そうじやなくて、しばらくの間あ鬼道院から出ないで欲しいんでさあ。他のみんなにも伝えてもらえますかい」

「……えと、分かりました。花巻さんは何処かへ？」

花巻は大きめの羽織を肩に掛け、壁に立てかけてある黒い杖を手に取つた。彼の身の丈程もあるそれには、金属の輪がいくつか付いており、持ち上げるとシャラシャラと軽い音がする。

緑は、その杖が鬼道長にしか持つことが出来ないことを知つていた。そして彼がそれを持ち歩くということは、即ち戦闘を意味することも。

「厄介事みたいで、外出てきますわ。みんなは危ないから、ここから出ないよう」

困つたように眉を下げて笑う彼の姿は、鬼道衆に入つて数十年の緑の目から見てもやはり、とても鬼道長には見えなかつた。

犬猿の二人

九 花巻は基本的に温厚で友好的な男だ。多少だらけたところはあるものの、それも人に不快感を与える程のものではなく、少なくとも嫌われるタイプの者ではなかった。

ただし、例外もある。

筆頭としては十一番隊、主に隊長の更木剣八。副隊長の草鹿やちるはそうでもないのだが、彼は花巻のことを毛嫌いしている。

もとより戦闘部隊である十一番隊は、自分自身には大した力がなく、味方の背に隠れてちまちま攻撃するような鬼道衆のことが気に入らない。多少の偏見はあるものの、まあ彼らの考えはあながち間違えではない。

鬼道衆の殆どは剣の才能がなく、真央靈術院を卒業後行き場を失くしたところを花巻に拾われた者ばかりだ。特別何か功績を挙げた訳じやないし、鬼道長である彼を除いては戦闘能力は護廷十三隊の足元にも及ばない。

彼の噂は耳にすることが度々あつた。所詮は鬼道長とはいえ、強いなら構わない、戦つて見たいと思つたのだ。

が、本人を見て目を見張つた。剣八はその時のこと今でも覚えている。いや、死んでも忘れない。

——なんだ、このモヤシ野郎は。

身体は細く、肌は女と見間違うほど透けるように白い。金色の瞳はやる気が無さそうにぼんやりとしている。加えて言うと喋り方は阿呆みたいで、見ていてこっちの気が抜けそうだ。

ヘラヘラ笑う、ペラペラした身体の男。強さの欠片も感じない。剣八より随分前から死神だったらしいが、よくこんな奴が生きていられるものだ。

とにかく、出会つた頃から更木剣八は九花巻のことが気に食わないのだ。その思いは今でも変わつていない。

「おー、更木くんじゃあねえですか。久しぶりでさあ」

なのに、こうして本人は相変わらず何も考えていないようなアホ面で話しかけて来るものだから、剣八の苛立ちは募る一方だ。

ただでさえ、いきなり隊首会に集められ気が立つてているというのに、その上世界一嫌いな相手と出会つたのだ。機嫌が悪いなんてレベルじやない。

「・・・チツ、なんでてめえがこんなとこにいんだよ」

「なんでつて・・・。そりやあぼくも今回は隊首会に参加するからでさあ。知らなかつたんで?」

「ああ!」

初耳だ。実際は伝えられていたが、忘れているだけなのだが。目に見えて、剣八の不機嫌さに拍車がかかつた。

「てめえなんざいらねえんだよ。とつとと帰りやがれ」

「や、ぼかあ元柳斎さんに呼ばれて来てんと、そんではい帰りますとはいかんでしょうや」

花巻とて帰つていいならば、今すぐ帰つて布団にダイブしたいところだが、そんなことしたなら拳骨どころでは済まないことは分かつているので帰るに帰れない。せめて何が起こっているのかくらいは知つておかねば。

「くそが、ついてくんじやねえよ! モヤンシ野郎!」

「行き先が同じなんだから、ついてくつもりじゃなくとも、そうなつちまうでしようや・・・つ、うわ、」

腹立しさをついに行動で示し、花巻の胸ぐらを掴むと珍しく彼から驚いた声ができる。気の短い剣八にしては、これでもよく我慢した方だと思う。

見た目通りに軽い花巻の身体はアツサリと引き寄せられ、剣八の方が身長が高いこともあり、僅かに地面から足が離れる。

「けつ」

昭和のヤンキーのように、唾を吐き出してから乱暴に花巻から手を離し、大股で去つていく。

いきなり支えを失つた花巻はその場でコテン、と尻もちをついた。

何とも無様である。

しばらく惚けたようにパチパチと瞬きをしてから、着物を直しつつ立ち上がって一言。

「更木くん、そつちは一番隊舎とは方向が逆なんじやあ・・・」

そんな花巻の声は彼には聞こえておらず、剣八が道に迷ったと気づくのはもうしばらく後である。

■ ■ ■
「なんだつたんでき、彼は」

花巻は後頭部をポリポリとかきつつ、咳く。怒鳴り散らすだけでして、消えてしまつた。出会い頭になんて失礼な男だ。虫の居所でも悪かつたのだろうか。まさか生理か、なんて考えてもみたが、剣八は男だ。そんなわけが無い。

だとしたら、やはり嫌われてるのだろう。これで花巻は意外にメンタルが弱い。人から嫌われればそれなりには傷つくのだ。

「おやおや、相変わらず更木隊長とは仲が悪いのかい」

「・・・京楽さん」

聞き覚えのある声に振り返ると、頭に藁でできた笠を乗つけた男性が歩いてくる。女物の半纏が特徴的な彼は、八番隊隊長の京楽春水。余談だが、女ずきな事で有名である。

一部始終を見ていたらしい京楽に、花巻は器用に渋い顔で笑う。

「仲が悪いっつうか、あつこさんが一方的にぼくのことお嫌つてるだけさあ。ぽかあ、ああいうギラギラした人が苦手つてえだけで」「うーん・・・花巻くんも、もうちょっととこう、霸氣を持つたらどうだい」

「数百年生きてきて、今更性根を直せつつうのは無理な話でしょ
や。・・・そもそも、あんたさんに霸氣を持てとか言われたか
ないですわ」

霸氣のあるないでは、京楽も花巻と似たり寄つたりだと思う。

どうも、根っこが似たもの同士である二人の仲は良さそうだ。年齢は京楽の方がいくらか上だが、これだけ生きているとあまり差がない

のかもしない。

「そいじやあ、いつまでもくつちやべつてると山じいに怒られちゃうから、そろそろ行こうか」

花巣の薄っぺらい背中を、元気づけるように叩いて隣合つて一番隊舎へ向かのだつた。

「・・・・・」

「ちよつとー、いい加減元気出しなさいよ。花巣くん」

「・・・別に、いつも通りでさあ。ぼかあ、ただの腰抜けモヤシ野郎なんで」

「ハイハイ、不貞腐れないのでね」

鬼道衆と書き、大家族と読む

「――事態は火急である」

一番隊隊舎にて一番隊隊長、及び護廷十三隊総隊長の『山本元柳斎重國』は重々しく口を開いた。

悠久の時を生き続け、数々の修羅場をくぐり抜けてきたその姿は、例え老いていようとも圧倒的の一言。

元柳斎を中心として、向かい合わせになるように各隊長が並んだその姿は、ピリピリと肌が張り詰めるような威圧感がある。

(やー、まあつたく。居づらいつちやあありやしませんや)

そんな中、一人フワフワとした九 花巻が潜り込んでいるというのだから、彼にとつては相当窮屈な現状であるのに違いない。

その上、護廷十三隊所属ではない花巻は隊長たちの横に並ぶ訳にはいかず、結局隊長を挟んで元柳斎の正面に立つ形になる。

総隊長と鬼道長。立場上は同格としても、やはり生きてきた年数が違う。正直言つて恐れ多い。何より剣八の目が怖い。

そんな花巻の思いを知つてか知らずか、元柳斎は続きを話すため手にした杖で床を叩き、場の緊張感を高める。

「遂に、護廷十三隊の副官を一人欠く事態となつた。もはや、下位の隊員たちに任せておけるレベルの話ではない。・・・・・よつてこの事態をうけ、先の市丸の単独行動については不問とする」

しゃがれた声で告げた元柳斎に対し、市丸は糸目を更に細めて胡散臭い笑顔で「おおきに」と一言。

「なお、副隊長を含む上位席官の邸内での斬魄刀の常時携帯、及び戦時全面解放を許可する！」

元柳斎は一度目を伏せた後、ゆっくりと開き、瞳に断固たる決意を宿らせた。

「諸君。――全面戦争と行こうじゃないか」

護廷十三隊。そして、当代鬼道衆大鬼道長。

相手は、戸魂界内に現れた招かねざる客人たち。

数百年ぶりの大事件に、しかしこの事態の裏側で何が起こっていたか、全てを理解出来ている者は現時点、極わずかだった。

「——つてえ訳で、いきなり何がなんだかって感じでしようが、今あこんな状態でさ。しばらくあ、あんまし外に出んで下さいや」

パンパン、と二度手を打ち鳴らして、鬼道院の大広間の中心に立つた花巻は鬼道衆全員に現状を告げた。想像していた通り、どよめきが広がり皆一様に驚きの表情をうかべている。

朽木ルキアの処刑を止めるために来たならば、まず向かう場所は懲罪宮せんざいきゅうだろう。そこは鬼道院とはまったく逆の方向だ。よつて、鬼道衆の安全はほぼ確保されたと言つていい。

「まあ、色々不安な事もあるたあ思いますが、皆さん的安全はぼくがちゃんと保証しますんで」

花巻が外に出る時にはしつかり鬼道院に結界を張るし、何かあつたらすぐに伝令機で連絡を入れるよう言つてある。

些せか過保護かもしれないが、今回は花巻も嫌な予感がするのだ。昔から彼のこの手のカンは外れたことが無い。

まだ、鬼道衆には戦えるだけの力がついていないのだ。用心していて損はないだろう。

「あ、あのつ。花巻さん、朽木さんの処刑つて……本当なんですか……？」

「ばかあ、そう聞いていますなあ

「・・・・・そう、ですか」

小さく手を挙げて聞いてきた少女に、偽らず教える。

鎮痛な面持ちで、俯く彼女と同じように何人かは悲しげな顔をしていた。知り合いのかもしない。

困ったなあ、と花巻は頬をかく。

「・・・わ、たし、朽木さんと同期で。その・・・話をしたこととかはないんですけど、いつも眞面目で、私みたいな出来損ないとは違つて・・・その、凄いなつて・・・だから、えつと・・・」

「・・・」

「つ、ごめんなさい、私何言つてるんでしょう・・・」

少女は自分の失言に気つき、慌てて花巻に頭を下げた。ただでさえ、剣術も鬼道にも才能がない自分を拾つてもらつた恩があるというのに、これ以上彼に我儘を言おうとしていたのだ。

いくら何でも、それは身勝手が過ぎる。

「そんな顔せんでくださいや。ばかあ、君たちが悲しそうなんは見た
かかない」

ぼすん、と頭を撫でられた。はつと顔を上げると、いつも通り鷹揚に笑う花巻がいる。安心させるように、大切に少女を撫でる彼に恋慕の感情はなくとも、そこには確かな愛情があった。

「朽木ちゃんの処刑は、できる限りぼくが元柳斎さんに頼んでみや
しう。・・・それで駄目だつたらそん時は――」

「わあああ、花巻さん大好きですうう!!!」

「あ、ずりい！自分もつす!!花巻さん自分も大好きっす！愛しててるつ
すー!!」

「どきなさい！新入りの分際で生意氣ね、私のほうが大好きに決まつ
てるでしょー！あい、らぶ、かざりいいいい!!」

「地獄だつてお供するぞおおお！花巻さああん!!」

「うわつ、一度に抱きつかんでくださいや！重い重い!!あー！押し倒
すな！鼻水つけるな！乗っかるな！そこ喧嘩しなさんな!!」

大勢にもみくちゃにされて、花巻は戦う前からボロボロである。着物も皺々になり鼻水はついてるは、男どもが興奮して脱がされかけるは散々な目に遭つた。

皆仲良し。トップがあんなほのぼのした男だからこそ、それが実現されるのだろう。

これが、鬼道衆が『大家族』と呼ばれる所以である。

それぞれの思惑

「こりやあ、本格的に嫌な感じがしてきましたなあ」

薬品臭いベットに横たわった赤髪の青年——阿散井恋次の包帯を手慣れた様子で替えつつ、花巻は眉をひそめた。

一応まだ包帯をつけているがそれは保険のようなもので、その下の恋次の身体は、何事も無かつたように綺麗になつていて。中々に深かつた傷だつたが、鬼道長の彼にかかるはこんなものだ。

現在、四番隊隊舎で怪我人の手当てを手伝つてゐる彼だが、運ばれて来る者は増える一方に思える。

何より、副隊長の中でも実力者と言える恋次の負傷は、にわかには信じ難い話だつた。實際、こうして対面してしまえば、信じる他ないのだが。

何はともあれ、一応気合いを入れて持つてきた鬼道長の証である杖は、どうやら使われることはなさそうだ。四番隊隊士に比べて怪我人が圧倒的に多いため、花巻はここを離れられそうにない。

四番隊隊長の卯ノ花烈程ではないが、鬼道長である以上『破道』『縛道』は勿論のこと『回道』も極めている。

よつて、急遽助つ人として駆けつけた花巻と卯ノ花の二人で重傷の者を治療し、残りの一般隊士で軽傷の者を治す形となつた。

卯ノ花の方はもう片付いたろうか、そんなふうに考へてゐる時、パタンとゆつくり扉が開いた。卯ノ花烈だ。

ここに来たということは、彼女の仕事はもう終わつたのだろう。

「——阿散井副隊長の様子はどうでしょう、花巻さん」

子守り唄のような、おつとりした声が聞こえ、忙しく手を動かしながら花巻は声だけで答えた。

「完全回復、とは言えませんわ。傷は治しやしたけど、どうにも出血が多くて」

今も恋次の腹部に手をかざして治癒しているが、回道でも外部から癒せる場所は限られている。失った血液は花巻でもどうしようもない。「そうですか」とこぼした彼女に、今度は花巻が質問を投げかけ

る。

「そんで、白哉くんはなんて？」

「牢に入れておけ、と」

「・・・そら手厳しい」

たはは、と相変わらずな友人に力なく笑った。この容態の者を治療もせず牢に放り込んでおくなんて、殺すも同然だ。自分隊の副隊長にそれはあんまりではないか。

まさかとは思うが、このままだと治療した花巻も怒られるのではないかろうか。彼は自分にも他人にも、勿論花巻にも容赦がないのだ。「・・・それにしても、一体何が起こつてんでしょうや。阿散井くんがやられるなんて」

「それだけ旅禍も本気ということでしょう。・・・幸い死人は出ていませんが、それもいつまで続くか」

「うひやー、おつかない」

憂いをおびた顔をする卯ノ花に、花巻は敢えておどけたように、ケタケタ笑つた。

出来ることなら、即刻隊長たちに捕獲してほしいものだが――、「――そうなると朽木ちゃんを助ける奴がいなくなる、と。ままならないもんでさ」

そう、花巻は卯ノ花に聞こえない程度の大きさで小さく呟いた。
旅禍が捕獲されれば、ルキアを助けるのは花巻がやるしかなくな
る。花巻自身は朽木ルキアと関わりはないので、彼女が処刑されるこ
とに関しても可哀想だなあ、と思うぐらいなのだが、鬼道衆がルキア
の処刑を嫌がるのなら話は別だ。

自分の手の中にあるものは、たとえ命が尽きようと守りきる、これは随分前に花巻が花巻自身に誓つた約束である。それが彼と何の関係もない少女であろうと、少なくとも鬼道衆の連中が少女のことを良く思つてゐるのなら、その少女も花巻の保護対象だ。

心の中で腕を組み足を組み、考えるポーズをしていた彼の思考を搔き消すように、突如大きな音が響き、一人の死神が転がり込んできた。花巻と卯ノ花は顔を見合させてから、揃つて目を丸くした。

入口付近にはぜえぜえ、と肩を揺らして息をする裏廷隊の男がいる。

「う、卯ノ花隊長、伝令が……！……ああ、良かった、鬼道長殿もいらつしやる！」

「……良い知らせでは、ないようですね」

荒い息で途切れ途切れ言葉を紡ぐ男に、花巻は出来れば聞きたくないなあ、思つた。しかし、どうやら彼は花巻のことも探していたようで、このままフェードアウトするわけにもいかないのだ。

裏廷隊にちよつとやそつと走つただけで息をきらすような者はない。ならばその伝令とやらは、その彼を驚きで平静を失わせる程のものなのだろう。

男は律儀に二人の前で膝をつき、顔を青くして、

「——五番隊隊長、藍染惣右介隊長が何者かに殺害されました！」

■ ■ ■

二番隊隊長、碎蜂は辺りを見回して怪訝な顔をした。彼女の横には副隊長の大前田希千代が相も変わらず間抜けな面で突つ立つており、キヨロキヨロと周囲に目を向ける碎蜂に頭に疑問符を浮かべる。

「……随分と集まりが悪いな」

呴いた碎蜂の声が聞こえたようで、大前田が横で「ええつ？」と聞き返し、真似るように辺りを見回した。

言われてみると、確かに人数が少ない。これから朽木ルキアの処刑を行うというのに、隊長、副隊長が揃つてているのは総隊長が率いる一番隊と碎蜂たち二番隊、京楽の八番隊。四番隊副隊長の虎徹勇音の姿は見えるが、隊長の卯ノ花はいない。

隊長が殺害された五番隊と、同じく隊長が負傷した十一番隊と十二番隊は分かるが、残りは何処で何をしているのか。

それに、

「あの、だらけモヤシは何処で油を売っているのだ……！」

どこかの鬼道長の顔を思い浮かべて、碎蜂は歯軋りをした。無駄にお人好しな彼のことだから、また誰かの世話でも焼いているのだろう。それで本人が遅れてどうする。チツ、と碎蜂は淑女らしからぬ舌打ちをした。

仲が悪い訳ではない——と、花巻は思つてゐる——一人だが、根本的に性格が真逆なのだ。

隊長としての使命と矜持を何よりも優先する、眞面目の塊のような碎蜂。へらへらと薄っぺらい笑みを浮かべ、常にだらけきつた花巻。昔から、よくぶつかり合う事があつた。・・・もつとも、キレた碎蜂が花巻を怒鳴りつけ、花巻が愉快そうに笑いながら受け流すだけだが。

鬼道という部門においては、隊長の自分すら足元にも及ばないといふことが余計に悔しく感じ、次に会つたらあのペラペラした身体に拳をめり込ませてやろう、と密かに心で決意した。

「それにしても、卯ノ花や朽木まで來ていないとはどういうことだ……？」

某モヤシのような、待ち合わせの五分後に着くことをモットーにしているようなダメ死神ならまだしも、卯ノ花烈や、朽木白哉のようにまともな者が時間に遅れるとは考えずらかつた。

何かあつたのか、と考えている時に視界の端に長い黒髪の男が映る。隊長羽織を翻して悠然と歩を進めてきたのは、朽木白哉だ。

彼は義理とはいえ妹の朽木ルキアが磔にされていることには目もくれず、京楽の隣に並び立つた。

「——朽木ルキア。何か、言い残しておくことはあるかの」

杖に両手を乗せて目を細める元柳斎の、蓄えた髭がゆらゆらと揺れる。

ルキアは一度瞑目してから、ゆっくりと瞼を持ち上げて掠れた声で答えた。

「はい。．．．一つだけ」

——せめて、あの愚かで馬鹿らしいほど、何処までも真っ直ぐなあの少年だけは、生きて現実へ帰れるようにな。

■ ■ ■

不思議と、『怖い』という感情は無かつた。

もう、あと数分とかからずに命を失うというのに、ルキアの心は極めて穏やかだつた。

全てを諦めたような自暴自棄ではないと思う。

寧ろ逆だ。全てを信じていて、こうして安らかに死ねるのだ。思い残したこと、やり残したこと。ましてや後悔したことなど一度たりともない。

——私は、良く生かされた。恋次たちと出会い。兄様に拾われ。海燕殿に導かれ。．．．そして、

一護に、救われた。

たつた数十年。死神にしては短すぎるその生に、しかしルキアは心の底から満足していた。

燃え盛る炎——双極の力を前にして、彼女の脳裏に様々な記憶が蘇つた。

「．．．ありがとう」

迫り来る双極の真の姿『燐鷙王』は、炎の鳥のよう。彼をして、ルキアは静かに瞳を閉じた。最後に一言、感謝を伝えて。さようなら、と口の中だけで呟いた。

「——若い子が、そう簡単に諦めるもんじゃないでしようや」

——刹那。轟音が聞こえて、彼女に訪れるはずの痛みはやつて来ず、閉じた瞳を再度パチリと開けた。チリチリと肌を焼くような、微かな炎の塵こそあるものの、死からは程遠い。

「え・・・？」

眼前には、風に煽られて大きく泳ぐ藍染の着物に、ルキアと同様の死霸装姿の男。細い背中は女のように、杖を握る手も男とは思えないような白さだ。

吹けば飛ぶように貧弱で頼りない、儚げな彼をルキアは知つていた。

「き、鬼道長、殿」

「おや、ぼくのことをご存知で？」

目を細めて、猫のような笑みを浮かべる彼の名は九 花巻。鬼道衆に入つた、ルキアの同期が敬愛している上司だ。そんな彼が、何故自分で助けに来たのか。

「だつ、ダメです！ 鬼道長殿、危険です、燐鷙王が！」

「まあ、落ち着きなされや。そんなに気張つてちやあ、疲れちまいまさあ。何事も、のんびりゆつたりが一番。こりやあぼくの持論なんですか」

あつはつは、と軽く笑い飛ばす花巻だが、その間にも燐鷙王は彼に接近している。このままではルキア諸共お陀仏だ。まさかこいつ、ルキアの事を助けるつもりですらないのか。ただ単に自分も死にたいだけなのか。

そう疑つてしまふほど、今の彼はふわふわとしてやる気を感じられず、強さの欠片も感じなかつた。ちなみにルキアが知らないだけで、花巻にとつてはこの状態がデフォルトである。

燐鷙王はもう、すぐそこなのに彼には焦りが一切感じられない。

「鬼道長殿っ！」

「はいはい、聞こえてまさあ」

悲痛なルキアの叫びで、漸く花巻はのろのろと動き出す。

彼は軽く杖を振るつて、燐鷙王を閉じ込める結界を一つ、その上か

ら更に結界を張り、二重に覆つた。半透明の薄青の結界は見た目に反して頑丈で、僅かにヒビが入つたものの、しつかりと双極の力を制御している。

歴代最強とまで言われる鬼道長が張つた結界なのだから、当たり前といえば当たり前だが。

「長くは持ちやせんが……ま、時間が稼げりやあ充分でしようや。そんじや、あと頼んます。——浮竹さん」

彼はそれだけ言うと、処刑台を鬼道で軽々と破壊してルキアを肩に担ぎ、地面へ一直線に飛び降りる。

え、とルキアが口に出す間もなく、花巻の張つた結界ごと赤い繩が双極を縛り上げた。下を見ると、いつの間にか現れた白髪の優男、十三番隊隊長『浮竹十四郎』が安堵したようにルキアを見て薄く微笑んでいる。

「つ、まさか双極を破壊する氣か……！」

いち早く事態に気がついた碎蜂が、それを止めようと走るが、間に合わない。

地面上に打ち込んだ杭を浮竹が押し込むと同時に、繩に炎が走り、双極が花火のように弾けて塵となつた。

「おお。これはまた派手というか、なんというか」

「……遂に、氣でも狂つたか。花巻」

手で作つた庇を額に当てて、感嘆の声を上げる花巻の首元に刀が押し当てられた。決して速くはないスピードだったが、彼は避けようともせずに、へにやりと笑う。

「旅禍の肩を持つというのなら、私が貴様を斬る」
「ほお、そりやあ面白い。白哉くんと戦うなんて何百年ぶりでしょうや」

相変わらず、飄々として掴みどころのない花巻に、白哉は眉間の皺を濃くして刀に力を込めた。花巻の白い首に刀がくい込み、ポタポタと血が零れるが、それでも彼は笑っている。
「でも」と花巻は白哉の斬魄刀を手でなぞり、白哉の背後に目を向けた。

「きみの相手は、ぼくじやあなくて、そちらさんみたいですね」

バツ、と気配に気づいた白哉が振り向きざまに斬魄刀を振るう。しかし、受け止めた感触は肉を斬るそれではなく、無骨な大剣だつた。鉄同士がぶつかり合い、甲高い音が鳴つた。

「よお、白哉」

「・・・黒崎、一護」

明るいオレンジ色の髪をした少年が、白哉の斬魄刀を受け止めて不敵に笑つた。花巻の肩の上にいるルキアがそれを見て息を飲む。

馬鹿者、と怒鳴りつけようとする彼女を、その前に花巻は遠くから駆けてきた赤髪の青年に投げ渡した。

「うおおわ!!」

「恋次! 生きておつたのだな!!」

「阿散井くんー、傷は塞がつても病み上がりなんで、調子に乗らないように。出来るだけ早く、遠くに逃げてくださいや」

「・・・無茶言つてくれるぜ・・・」

四番隊から花巻と共にここまで来た恋次は、ルキアを胸に抱いて駆け出した。刀を抜いて、それを片手で操りながら邪魔な死神を倒していく。

「う、嘘だろ・・・阿散井」

「何を惚けているのだ、うつけども! 追えツ! 副隊長全員でだ!」

味方のはずの恋次や花巻が、旅禍に手を貸していることに、思わず動きが止まり、碎蜂に怒鳴られた。碎蜂の剣幕にハツとして慌てて斬魄刀を解放し、副隊長三人で阿散井を追いかける。

「――縛道の九、^{げき}撃」

しかし、三歩ほど足を進めたところで身体を赤い光が縛り、身動きがとれなくなる。結界、頭からすっ転んだ無様な三人を、元凶である花巻は屈託なく笑つて言つた。

「ちよお、大人しくしてて下さいや」

詠唱破棄、そして三つ同時に発動しているというのに副隊長クラスでも解けない威力。その上、使用しているのは縛道の九とかなり初級のものだ。本来なら、これほどの威力が出るものではないし、副隊長

の彼らが脱出するなんて訳無いはずなのに。

「くそつ、なんで解けねえんだよ‥‥！」

「やー。実は、ぼかあ、破道よりも縛道の方が得意でして」
苛立つた大前田の声に返ってきたのは、答えになつていてるようになつていないものだつた。動けない三人を放置し、花巻は一つ深呼吸してから、目を伏せる。ここからが、彼の正念場。

「さて、と」

シャラン、杖の飾り輪を揺らして振り返つた。

身体中から闘氣を滲ませて、花巻を睨みつける元柳斎に向かい合つた。

「——これは一体どういうつもりじゃ、花巻よ」

「さあ? どういうつもりに見えますかい」

死神最強の護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國。
歴代鬼道長最強、当代鬼道衆大鬼道長、九花巻。
——総隊長と鬼道長は、明確な敵として対面した。

それは彼なりの

(あー、これはやばい。死ぬ。死んじまいますわ。だつてめちゃくちや睨んでくるし。ぼかあ、こういうギラギラしたのは苦手だつてえのに。やつぱり慣れないとすんじやあなかつたなあ。・・・あ。そういうや、机の中におはぎ入れたまんまでさ。来る前食べてくりやあ良かつた)

なんてため息を吐きつつ、花巻は心の中で一人ごちた。

生命の危機と言つても過言ではない状況だが、彼の顔に焦りの色は見えない。どころか、おはぎのことを考えているのだから、案外余裕があるのかも知れない。

いや、実際はそんなことはない。このまま殴り合えば確実に花巻が死ぬのだから。いくら彼が鬼道においては圧倒的才能を誇る者であろうと、相手は死神最強の護廷十三隊総隊長だ。真っ向から戦えば彼とて死は間逃れない。

この場にいる全員を巻き添えにしていいのなら、元柳斎を殺すことも出来なくはないが、その場合辺り一面が更地になる。恐らくはルキアや恋次も巻き込まれるだろう。彼女を助ける為に来たのに、止めを刺しては何の意味もない。

と、なれば花巻が出来ることはただ一つ。

「破道の三十三、『蒼火墜』そうかつい 拾撃じゅうげき」

「一む、」

搅乱、そしてそれからの逃亡。

一瞬にして、元柳斎を取り囲むようにして青い光が爆ぜた。その数はなんと十。詠唱破棄に複数使用で三十番台の鬼道を使用可能なのは彼くらいだろう。

もつとも、元柳斎がこんな事で死ぬような相手ではないことは分かつていて。だから、これはただの搅乱。

蒼火墜を発動させた瞬間、花巻は瞬歩で一気に遠くまで逃げ去った。

「逃げろ逃げろー。あんなバケモノとやつてられるか」

花巣という男は、元来臆病な死神である。死にたくないし、痛い思いをするのはもつと嫌だ。ルキアのように死を受け入れることなんて出来やしない。せめてあのおはぎは食べて死にたい。

本人は気づいていないが、こういうところが剣八に嫌われる原因だつたりする。

「ひゅー、しかし言うようになつたねえ。花巣くん」

崖から急落下していると、背後から茶化すような口笛が聞こえた。先ほどの花巣と元柳斎のやり取りのことを言つているのだろう。恐らくは京楽だ。落下しながら身体を反転させると、浮竹が京楽に抱えられている様子が見える。必死にもがいているところを見ると、どうやら自分の意思で逃げてきたようではないらしい。

「待つてくれ、京楽！まだ俺の部下が！」

「ちよ、正気ですかい、浮竹さん。今からあそこに戻るなんて自殺行為でさあ」

「つ、それでも！」

どうにか、京楽の手から逃れようとする浮竹を横目で見て、花巣は思わず顔を引き攣らせた。

双極の丘には、まだ浮竹の部下が二人いる。双極の破壊に一役買つたのであれば、生かせて貰えるはずがない。ましてや、あそこには碎蜂がいる。規律に厳しい彼女は何をするか分からぬ。

心配な気持ちは分かるが、あそこで元柳斎とドンパチやるほうがよっぽど危険だ。

「落ち着け、浮竹。あんなところで山じいと戦つてみろ、それこそ皆巻き込まれて死んじまう。・・・二人なら大丈夫さ」

何を根拠の無いことを、と言いかけた浮竹は、はたと動きを止める。遅れて花巣もそれに気づいた。

「感じないか？――」こへもう一人、僕らの味方が近づいてるのを」

いつもならば、瞬時に気がつくような隊長クラスの膨大な靈圧が双極の丘へ駆けてきてるのに、京楽に言われるまで分からなかつたのだ。浮竹だけではなく、花巣も冷静さを失っていたのだろう。

「さ、もうすぐ地面だ。しつかり踏ん張れ」

はあ、と再び深いため息をつき、花巻は着地の用意をした。

「——逃げたか」

草履で地面の砂利を苛立つた様子で踏みつけて、碎蜂はそう呟いた。裏切り者三人が爆炎に紛れて姿を眩ませた後、当然の如く元柳斎は無傷で現れ、この場を碎蜂に任せて瞬歩で彼らを追いかけた。賢明な判断だろう、旅禍は白哉が相手をしているし、死神きつての実力者三人が裏切ったというならばそちらの処理が先だ。

碎蜂にとつて、こうして何も語られず、裏切られ、置いてきぼりをくらうのはもう二度目だ。

一度目は、心から尊敬していた自分の元上司。そして今回は、数十年の付き合いになるあのちやらんぽらんな男。

友と認めた覚えはない。彼が何処で死んでいたつて関係なんてない。そもそも、彼とは反りが合わない。あの間抜けな面が気にいらなくて、人を小馬鹿にしたような喋り方も気に食わない。

——だというのに。

「なんだ、これは」

碎蜂の思いを置いて、頭をガツンと鈍器で殴られたような、ショックが身体を貫いた。心臓の音がやけに大きく感じ、手足は痺れるように震えている。

——これでは、まるで自分は彼に裏切られて傷ついているようではないか。

そこまで考えてから、碎蜂は頭を左右に振つて思考を止めた。これ以上考えてもマイナスな方向にしか行かないと感じたのだ。

しかし、それでもぐつぐつと、腹の中でマグマが煮立つような、激しい怒りが込み上げる。

何もかもが腹立たしい。裏切った彼も、そんな彼を少しでも信頼していた自分も。

そこで、

「・・・ああ、まだ居たのか」

力タカタと震えた手で斬魄刀を握る浮竹の部下、虎徹清音と小椿仙太郎の存在に彼女の意識が向く。

素直に逃げていればいいものを、鼻で笑い。しかし目元は虫けらを見るような冷徹に。

「——シツ」

一息に子椿の元まで距離を縮めて、鳩尾にタツクルするように掌底。肺から空気を吐きながら、仰向けに倒れた彼を踏み台に清音に飛びかかり、首を掴み締め上げた。

これが、僅か数秒のこと。

「・・・うつ、ああ」

「貴様らは、殺す。・・・奴も私がこの手で殺す」

苦しげに跪く彼女を見て、少し気が楽になるようだつた。きっと花巣も殺したら楽になる。心が、軽くなるはずだ。

なら、元柳斎に彼が殺される前に追いかけなければ。

冷めた目つきで、首に力を込めた次の瞬間。

「——な」

——訳も分からず、碎蜂は崖から突き落とされていた。否、一人ではない。碎蜂を下敷きにするように、彼女の腹の上に女が乗つている。覆面で顔は見えないが、体型から見るに女で間違っていないだろう。後頭部で一つに束ねられた髪も長い。

四方から身体を圧迫する風で、熱くなつていた頭が冷えていく。体勢を立て直そうとするものの、先ほどとは逆転して碎蜂の首を女が掴んでいるため、脱出も不可能。

「お硬いのも、素直じゃないのも、昔と変わらずか。相変わらずじやの、碎蜂」

「——き、さまは」

顔に巻いていた布が風に煽られ、女の顔が露わになる。褐色の肌に猫に似た目を釣り上げて彼女は獰猛に笑つた。

「——挨拶代わりじゃ。受け取れ」

左手に溜め込んでいた、破道を碎蜂に打ち込んだ。

碎蜂はそれに見向きもせず、込み上げる感情を大地を震わせる振動として、声に変換する。

「何故、貴様がここに居るのだッ、四楓院夜一!!」

——碎蜂にとつての最初の裏切り者が、『四楓院夜一』が碎蜂に襲いかかつた。

■ ■ ■

「結構離れたねえ」

「ああ。ここまで来れば他に危害も及ばないだろう」

「・・・そもそも、戦わないってえ選択肢はないんですかね」

「ちよつとー、花巻くんから売った喧嘩じやないの」

一方、人気のない場所まで飛んでくるようにやつて来た三人は、そこで一度足を止め、背後を振り返った。元柳斎が来ている様子はまだない。

危機感のないやり取りを京楽としていると、遅れて八番隊副隊長『伊勢七緒』が瞬歩で追いついた。玉の汗を額に浮かべて、肩を揺らして呼吸する七緒に、京楽が笑い混じりに言つた。

「七緒ちゃん、ビーリーー」

「たつ、隊長たちが速すぎるんです！」

「や、後ろからバケモンが迫つてくるつてえ思つたら、速くもなるでしょうや」

そういう花巻もあれだけ飛ばしたというのに、息一つ乱れていない。鬼道衆とはいえ、彼が死神の中でもトップクラスの実力者であることは間違いないだろう。

七緒はそんなふうに分析しつつ額の汗を拭い、ヘラヘラ笑う京楽に何か一言言おうとするが、しかしそれを花巻の低い声が遮つた。

「——来やしたな」

す、と空を見上げる花巻は数歩前へ出て、珍しくその顔から笑みを

消した。

いつものアホくささは何処へやら。花巣は黒い杖を握りしめて月光を閉じ込めたような瞳を、ゆっくり細める。普段とは違う彼の纏う霸気が、その場の酸素を奪い尽くすような不思議な圧迫感を与えた。

「あ」

口から、息を吐くような短い音が零れ、七緒は初めて、彼の事を『怖い』と思つた。

普段のほほんとしている花巣は、それでも鬼道衆を束ねる長であり、強者であるから大鬼道長の名が与えられているのだ。

知らずのうちに後ずさりしていたようで、京楽の胸板に頭が当たり、そのままへたり込んでしまう。

京楽は安心させるように七緒の頭を撫でてから、彼女を抱えて遠くまで一瞬で瞬歩。七緒を安全な場所に移動させて戻ってきた。

「ちよつと花巣くん。あんまり、うちの七緒ちゃんをビビらせないであげてよ」

「え、ああ、いや、あはは」

本人はどうやら無意識だつたようで、先ほどの殺意を瞳の裏に隠し、花巣は乾いた笑みを零した。

後に語るが、この時の花巣はただ単に元柳斎にビビつて、必要以上に威嚇していただけである。もつとも、それは元柳斎には何の意味も成さず、代わりに七緒に被害がいったわけだが。

だが、結果的に見ると、七緒をここから避難させたのは正解だつたかもしない。彼女も副隊長ではあるが、今から行われるのは正しく、人外同士の戦い。副隊長ごときでは命がいくつあつても足りないだろう。

「で、元柳斎さん。話し合いで解決……とかは、出来たりしますかね」「話し合いの余地を自ら捨てたのはお主じや、花巣。……お主のとした行動は、鬼道長として許されることではない」
「……年寄りは頭硬くて面倒ですなあ」

言葉を交わす気など端からない、と言わんばかりの元柳斎に花巣は肩を竦めた。

一拍遅れて、元柳斎の手に握られた杖が音を立てて燃え出す。中から現れたのは元柳斎の斬魄刀。

——つまりは開戦の合図だ。

「元柳斎、先生」

「何も言うな。——もはや、問答は埒もなし」

浮竹を、黙らせて「抜け」と元柳斎は声を押し殺して言う。そして、続ければまた斬魄刀を解放。辺りを紅蓮の炎が包んだ。

「世界の正義を蔑ろにする者を、儂は許さん。教えたはずじゃ」

「生憎、ぼかあ正義なんて目に見えないもんは、分かりやしません。・・・ただ、ぼくの大変な子たちには笑つてほしい、それだけでして」

——守りたい者が沢山出来た。親同然に慕つていた、先代鬼道長が行方を眩ませてから。

守りたいから、力をつけた。否、守りたいのではなく、花巻がもう二度と一人になりたくないだけかもしれない。

『男なら、一度決めたことは突き通しなさい』

尊敬する彼は、まだ何も無い、空っぽで枯れた花のようだつた花巻にそう教えてくれた。

だから——。

——あの子たちの笑顔を守る為に花巻はこんな所で野垂れ死ぬわけにはいかなかつた。

——元柳斎風に言うならば、これが花巻なりの『正義』だろう。

(あ、でも死んじまつたら骨くらいは拾つてほしいなあ)

・・・どこまでも締まらない彼だつた。

天に立つ

「なに、これ」

自分以外誰もいない、いつそ恐ろしいまでに静まつた地下議事堂で雛森桃は啞然と呟いた。だだつ広い地下に掠れた自分自身の声が響き渡る。

本来ここは一般隊士は勿論、副隊長である雛森ですら足を踏み入れることは許されない場所だ。まして、今自分は拘置の身。バレたら終わり、それが分からぬほど冷静さをかいているつもりはなかつたが、だとしてもここへ来ずにはいられなかつた。尊敬する上司を、藍染惣右介を殺害した犯人を突き詰める為には。藍染は日番谷冬獅郎に殺されたはずだ。彼自身がそう残したのだから、間違えがあるはずもない。だから、こつそり日番谷の後ろを靈圧を消して着いてきた。しかし、そこに広がつていた光景は雛森の冷静さをいともたやすく奪い去る。

吐き気がするような鉄臭さ。黒く固まつた血。『誰もいない』ではない。『誰も生きていらない』と表現するのが正しいだろう。

——即ち、死体の山。中央四十六室は皆死んでいた。

「ひ、ひつがやくんが、驚いてて……吉良くんが居て、日番谷くんはそれを追いかけていつて……。じやあこれをやつたのは日番谷くんじやない？でも藍染隊長が……」

藍染惣右介を殺したのは日番谷冬獅郎のはずだ。藍染自身がそう残したし、聰明な彼が勘違いや思い込みなどでそんなヘマをやらかすわけが無い。ならば中央四十六室を殺した者と藍染を殺した者は別人なのか。有り得ない。なんの目的があつてそんな事を。

「分からぬ……。分からぬよ……。何がどうなつてるの……？」
？藍染隊長は・・・、日番谷くんは・・・、吉良くんは・・・？」

ぐしゃぐしゃと黒い髪を自分で乱して、蹲つた。こんな事をしても意味なんてないが、それでもしないととても平静を保つていられないかつたのだ。

こんな景色が見たかつたんじゃない。大勢殺されているところを

見たかつたんじやない。ただ、藍染を殺した犯人を突き詰めたくて。日番谷が殺したんじやない、間違えだつたという確信が欲しかつただけ。それで――、

「――教えてあげよか」

「・・・え？」

耳元で囁くような声が聞こえた。驚いて飛びずさるように後ろに下がつて振り向く。大袈裟な雛森の行動が可笑しかつたのか、背後にいた銀髪の彼はくつくつと喉を鳴らして笑つた。口元を三日月に釣り上げる彼は普段と同じように何処と無く不気味だが、雛森は意を決したように声を絞り出す。

「い、市丸隊長・・・。教えるつて、何を・・・？」

「ぜーんぶ。僕が知つてる限りの事を、全て。知りたいんやろ？・・・ほら、ボケつとせんでついておいで」

手招きして市丸はそのままふらり、と歩き始めてしまつた。何処へ向かつているのかも雛森に告げずに。

猫のように自由気ままなその姿は雛森もよく知る鬼道長に似ていなくもいなが・・・。不気味さが段違いだつた。彼はこんなに気味悪く笑わない。鬼道長の彼が猫だとすれば――さしづめ市丸は『蛇』といつたところか。

市丸は雛森を待つてゐる様子はなく、目を離すとすぐに消えてしまいそうだつた。着いてこないならそれはそれでも構わない、とでも言いたげに。市丸は良くても雛森には今や彼が唯一の頼みの綱。見失つたら困るのは自分自身だ。雛森は我に返つたように市丸の後ろを追いかけた。

■ ■ ■

清淨塔居林。

四十六室のための居住区域で、如何なる理由があろうとも立ち入る

ことが許されないそこは、戸隠界唯一の完全禁踏区域だ。今雛森はそこにいる。

生真面目で規則を破つたことなど今まで一度もないような雛森にとつて、今日一日で随分悪い事をしてしまった気がした。実際それは『悪い事』なんて枠に収まらないくらいのレベルだが、雛森の頭はもはやそこまで考えられていなかつた。躊躇うことなくこの場に足を踏み入れた市丸も市丸だが、馬鹿正直に彼に着いていつた雛森もどうかしている。

もつとも、ここに立ち入つた事がバレたとしても罰を下す四十六室はもう既に死んでいるわけだが。

「市丸隊長……どうして、私をこんな所に」

「会わせたい人がおんねん。まあついてきいや」

奥へ奥へと歩いていた市丸が唐突に足を止めたことに困惑しつつ、雛森は拳をギュッと握つて一步踏み出した。『会わせたい人』とは誰なのか。彼は自分に何を教えるというのか。自分は……本当に彼に着いてきても良かつたのだろうか。

「あ、あの。会わせたい人つて私に、ですか……？」

「そうや。きみ以外に誰がおんねん。ほれ後ろ見てみい」

じやり、と草履が土と擦れ合う音が聞こえて、雛森はハツとして後ろを振り返つた。意図せず市丸の言いなりになつてしまつたらしい。

「え……」

そして愕然とする。

焦げ茶色をした緩やかな髪。

黒縁のメガネからのぞく温かい瞳。

雛森と頭一つ分違うほどの長身に、頼りがいのある身体。
そして、極めつけは――、

「やあ、雛森くん。心配をかけたね」

自分の名を呼ぶ、優しい声音。間違えなく、目の前にいる男は五番隊隊長藍染惣右介その人だつた。

「あ、いぜんたいちよう、藍染隊長・・・藍染隊長っ・・・！」

「ああ。僕だよ。心配させてすまなかつた」

そう言つて彼の大きな手が雛森の頭を撫せる。優しい手つきに口元から熱い吐息がこぼれて、雛森はうつとりと目を細めた。心が洗い流されるようだつた。温かくて、大きな手。紛れもなく、彼は雛森があれほど恋焦がれた藍染惣右介だ。

「本当に済まない・・・君をこんなに傷つけてしまつて・・・。でも、信じていた。君ならきつと分かつてくれる。僕にはやらねばならない事があつた。・・・その為に死を装つて・・・」

藍染の胸元にしがみついて、子供のように泣きじやくりながら雛森は必死に首を横に振つた。ポタポタと涙が溢れて、顔面は鼻水やら涙やらで大変になつてゐる。

「いいんです。もう、いいんです。藍染隊長が生きていてくださるだけで私はもう何も・・・」

「ありがとう。きみを部下に持てて、本当によかつた。ありがとう、雛森くん。・・・・本当にありがとう」

『さようなら』と。

そう聞こえたのと、腹部が燃えるように熱く感じたのは同時だつた。ゆつくりと崩れていく自分の身体。腹から生えた綺麗な刀剣。「なにこれ」と言いたかつた声は口から溢れ出た鮮血とともに搔き消える。地べたに膝をついた瞬間、徐々に力が抜けていつて遂には冷たい床に倒れ伏した。

——藍染隊長。どうして、斬魄刀を握つているのですか？

——藍染隊長。どうして私は倒れているのですか？

——藍染隊長。どうして、そんな冷たい目をしているのですか？

藍染隊長。藍染隊長。藍染隊長。藍染隊長。藍染隊長。

教えてください。答えてください。声を聞かせてください。いつ

もみたいに頭を撫でてください。

一生お側に居させてください。貴方の、役に立ちたいんです。
だから、だから。

「あ、い・・・せんたいちよう・・・」

掠れていく意識の中で、雛森は必死に手を伸ばした。が、伸ばした手はついぞ掴まれることは無く、藍染は市丸を連れて雛森に向向きもせず忽然と姿を消した。



「——そんで、ほんまに良かつたんですか？」

「良かつた、とは？ 何の事だろうか」

「分かつてるでしょうに。・・・九花厳くん、鬼道長のあの子。随分気に入つてたやないですか」

後ろを歩く市丸の言葉に藍染は薄く笑みを浮かべ、頬に付いた返り血を親指で軽く拭つて、ああ、と答える。

藍染の協力者は市丸と、それからあと隊長格がもう一人。

市丸は藍染は物や人に執着しない冷血漢だと思つていたが、何故だか九花嚴は例外だった。その理由は市丸は分からぬが。だから、本來なら藍染は九花嚴を味方に引き入れたがっていたのだ。

「構わないさ。どちらにせよ、着いてこいと言つて大人しく来るような性格でもないだろう。それにこの先どうせ全面戦争となる。実力行使なら、九花嚴を手に入れることも難しくない。なら、今急ぐこともないだろう」

「・・・あの子も藍染隊長なんかに気に入られて可哀想に」

「酷い言い草だな。何も危害を加えるなんて言つただろう。ただ気になるだけさ、彼という死神がね」

「気になるつて・・・自分より優れた所があるからですか？」

「勘違いするな、彼が優れているのは鬼道だけだ。それ以外では私の足元にも及ばない」

ハツと鼻で笑つてバツサリ切り捨てた藍染に市丸は目を丸くした。確かに花巻の鬼道の才能は恐ろしいものだが、剣術体術は特別光るものを持つてはいない。それは勿論市丸も分かっていたが、彼は藍染のこんなふうムキになつたような言い方に驚いたのだ。子供らしいといふか、余裕が無いというか・・・とにかく藍染らしくない。

九花巻は死神の中でもトップクラスの実力者と言えるし、敵に回すと非常に厄介ではあるが、強いだけなら彼以外にもいる。例えば、一番隊隊長山本元柳斎重國。例えば、八番隊隊長京楽春水。例えば十一番隊隊長更木剣八。

そんな中で、何故九花巻に執着するのかが市丸には理解出来なかつたのだ。

(藍染隊長つて意外に負けず嫌いなんやろか)

考えられる可能性としてはそれだけだが、藍染惣右介の心なんて藍染自身にしか分からないものだし、ぶっちゃけ興味もない。

手持ち無沙汰で特に意味もなく市丸が自分の斬魄刀を弄つていると、不意に正面から視線を感じた。込められた感情は殺意と困惑、といつたところか。僅かに目を開けつつ前を見て、市丸はわかりやすく顔を覗める。声をつけるとしたら「あちやー」といった感じだ。

「やあ。——日番谷くん」

「ハア、ハア、藍染・・・!?

息を切らせる程必死に駆けてきた銀髪の少年——十一番隊隊長日番谷冬獅郎は藍染の姿を見て、息を呑んだ。藍染惣右介が殺害された、という情報はやはり嘘だった。そう理解した瞬間、右手は背中に吊るした斬魄刀に伸びているのだから日番谷は優秀だと言えるだろう。市丸は、藍染は敵なのか味方なのか。ゆっくりと斬魄刀を鞘から抜きながら油断なく二人を見つめて、そこで日番谷は愚かにも動きを止めた。そもそも日番谷は雛森を追つて此処に来たはずだ。その雛森の姿が見えない。加えて、強い鉄の匂い。

「——てめえ・・・雛森は何処だ!」

「さあ何処だろうか」

ギリ、と音がするほど歯噛みして日番谷は藍染と市丸の間を瞬歩ですり抜けて、更に奥へと足を進めた。

結論から言えば、雛森は確かにそこにいた。ただ無事か、と言えばそうではない。腹部からは夥しい量の鮮血が流れ出ている。血の気の失せた青白い肌。かろうじて動いているだらう心臓。シロちゃん、いつまでたつても恥ずかしいあだ名で呼んでくる雛森は日番谷が声をかけても返事をすることは無かつた。

「残念。見つかってしまったか。済まないね・・・君を驚かせるつもりや無かつたんだ。――せめて君に見つからないように粉々に刻んでおくべきだつたかな」

ちつとも「済まない」なんて思つていなさそうな口振りでクスリ、と藍染は笑つた。ここで日番谷の憶測は確信に至る。間違えなくここに居る藍染惣右介は敵だ、と。

「・・・藍染、市丸。いつから、いつからグルだつた」

「勿論、最初からだよ。私が隊長になつてから、ただの一度も彼以外を副隊長と思ったことはない。：：ああそう怖い顔をしないでくれ。何も騙していたわけじゃないんだ。ただ君たちが誰ひとりとして理解していなかつただけさ。僕の本当の姿を」

握りしめた拳から血が滲み、日番谷の声は怒りで震えていた。日番谷の怒りが最高潮に達したことに気づき市丸を一足先にため息をつきつつ瞬歩で遠くへ避難。遅れて、自分の元まで冷氣が届き、市丸は自分の判断が間違いでなかつたことを知る。

日番谷の身体を覆うような氷の龍。背後に浮かぶ三つの花を思わせる氷の結晶。『冰雪系最強』の名を冠するその解放の名は――大紅蓮氷輪丸。

吹き荒れる吹雪をもろに食らつただろう藍染は無事か、と一瞬目を凝らすもののあの藍染惣右介が無事でない筈がない、とすぐに自分の安全を確保するよう距離をとつて傍観の体制に入った。するとそのままあとに藍染が市丸の元に吹雪から逃げるよう跳躍してくる。

「藍染・・・てめえは俺が殺す」

殺意のこもつた日番谷の声に、藍染は怯えた素振りも見せず満足そうに笑つた。斬魄刀も抜こうとしない。完全に無防備な状態、この機を逃す手はない。

「うおおおおお!!!」

猛々しい雄叫びとともに、鋭い刀は藍染惣右介の身体を貫いた。・・・確かに貫いた、筈だつた。

突き刺した直後に藍染の身体が氷始めて、最終的には彼の身体を完璧に氷結させた。・・・これも間違えがない筈だ。

「・・・な、に・・・?」

——だと言うのに、日番谷の身体はゆっくりとうつ伏せに倒れていき、肩から赤い何かが飛び散っていた。訳が分からぬ、というのが本音。後ろで藍染が何か言つていた気がしたが、それすら日番谷の耳には届かず。歪に笑う藍染の姿だけが脳内に張り付いていた。

■ ■ ■

——同時刻。場所は第三旧市街跡。

人つ子一人いない枯れ果てた土地に、彼らはいた。

「・・・ほんとに、勘弁してほしいですなあ」

肌がチリチリと焼けるような熱気と、正面から向けられる圧倒的な霸気に花巻は顔を引き攣らせて呟いた。迫り来る炎を結界や鬼道を上手く使つて何とか生き延びていたが、防戦一方。傍から見れば花巻は元柳斎と互角に戦つてゐるよう見えるが、二人の力の差は歴然。花巻が焼死体になつていないので、ひとえに彼の戦い方が上手いからだ。

これもいつまで続くか、といったところ。そもそも元柳斎は本気を出していいない。卍解をしていいのがいい例だ。元柳斎がその氣になれば花巻など一瞬で灰になつてしまふ。流石に尸魂界内で卍解するほど考えなしではないと思うが、その気にならないことを祈るしかない。

「助けに入ろうなんて馬鹿なこと考えるなよ、浮竹」

「つ、京楽……だがこのままでは」

「あそこに混じつても山じいの炎で燃え散らされるか、花巻くんの鬼道に巻き込まれるだけだ。……僕らの仕事は、別にあるだろう」

花巻の様子を見て耐えられないと言わんばかりに、飛び出そうとした浮竹を京楽が静かに手で制した。花巻は味方の多い場所では大して役に立たない。彼が得意なのは一対多。良くも悪くも威力が強すぎる彼の破道は仲間を巻き込むことの方が多いのだ。浮竹と京楽が手を出せない理由はここにあつた。

『ぼくが元柳斎さんと戦いますんで、死んじまつたらその後の尻拭いお願ひしてもいいですかね』

第三旧市街跡に着いて、花巻が一番に言つた言葉だ。彼がそう易易と命を落とすとは考えずらいが、京楽達の仕事は彼の尻拭い。頼まれたからにはそれを真っ当しなければならない。たとえそれで花巻が死闘を演じているのを見守る事しか出来なくなつたとしても、だ。

手を出したくとも、出来ない状況に浮竹がもどかしさを感じていると元柳斎の炎が遂に花巻を囲んだ。結界を張る余裕も時間もない。四方から襲う灼熱に京楽までもが焦燥感にかられる。

「花巻くんッ！」

呼んだ声に返事が返つてくることはなかつたが、変わりに小さな声が聞こえた。

「——爆ぜろ」

花巻が錫杖を横に振るい、更地の一角で爆発が巻き起ころ。爆風と砂埃が吹き荒れて、思わず二人は訳も分からずにとりあえず死霸装の袖で顔を覆つた。砂粒が身体に叩きつけられる感覚に眉を寄せながら、浮竹は畠然とする。

「あの一瞬で同威力の破道をぶつけて、相殺したのか……」

人間業、というか死神業じやない。少し威力を間違えたら自爆になつてしまふ。それに彼からは詠唱の声が何も聞こえなかつた。詠唱破棄だとしても、何かしら必要な手順というのにだ。それをたつた

三文字、『爆ぜろ』だけで発動させるなんて聞いたことがない。

爆発の中心にいた花巣は煙を吸い込んだのか何度も咳き込んでいるものの、命に別状はないよう見える。ホツと一息つくと、砂煙を手で払いながら悠然と元柳斎が歩いてくる。その元柳斎ですら、驚愕を声に含ませていた。

「遂に無詠唱にまで足を踏み入れたか。恐ろしい才じやの」「あつはつは、少し練習すりやあ誰でも出来ますわ。難しいことじゃない」

花巣はなんてことの無いように快活に笑つてみせた。難しいことじやない、と彼は言つたがその領域に届くまでにどれだけの努力がいるのか。少なくとも戸魂界内には花巣ただ一人しか、無詠唱なんて化け物じみたことは出来ない。底知れない才能とそれと同等の血のにじむような努力。その結果が無詠唱なのだから。

だが不幸にも花巣が見せた無詠唱の破道は、元柳斎をその気にさせてしまつたらしく。

「——ならば、儂も少し本気を出すか」

ざわ、と背筋が泡立つて花巣が一度距離をとろうとした時、その声は響いた。

『護廷十三隊隊長、並びに副隊長、副隊長代理各位、鬼道衆大鬼道長…：そして、旅禍の皆さん。こちらは四番隊副隊長虎徹勇音です』

緊急電信。恐らく鬼道を使用したのだろう。聞こえてきた声は大気を震わせるものではなく、頭の奥底で響くようなものだった。ならば、鬼道を用いる程の重要な情報なのか。というか旅禍にまで伝えてしまうような内容なのか。花巣はズリズリとすり足でゆっくり後ろに下がりながら、そんなことを考えた。

今から話すことは全て、紛れもない事実です。そう前置きされて伝えられた内容は——、

「……あー、そりやあ旅禍だ敵だの言つてられませんわな」

五番隊隊長藍染惣右介の裏切り。そして日番谷冬獅郎、雛森桃の負傷。

一触即発だつたその場は、出鼻をくじかれた形で何とも微妙な雰囲気が流れる。一番に口を開いたのは、これまた花巻だつた。

「……ええと、とりあえず一時休戦つて形でいいですかね」

「ふむ……」

「まあこんなことしてゐる場合じやないよね、僕ら」

「……賛成だな。今の話だと朽木が危ない」

シリアルスからの急展開に四人の爺は気まずくなりながら、満場一致で一時休戦となつた。

■ ■ ■

「……こりやあ皆さん、お揃いで」

再び舞い戻つた双極の間。花巻や元柳斎、浮竹、京樂の四人がそこに着く時には各隊の隊長格、数名の侵入者達がいた。筆頭としては旅禍の数名、元五大貴族の一員志波空鶴ら、そして元二番隊隊長四楓院夜一だ。

既に裏切り者とされてゐる藍染惣右介、市丸ギン、東仙要の三人は拘束されており事態の收拾はついているように見える。そうは言つても、今この場で油断している者は一人としていないが。

「終わりじゃ、藍染」

抜刀出来ないように、藍染惣右介の斬魄刀『鏡花水月』を押さえつけながら夜一は唸るような低い声で言い放つた。ふつ、と少し口元に笑を浮かべる藍染の首には碎蜂の斬魄刀が押し当てられていた。逃げ場など何処にもないこの状況で笑う彼に不気味さを覚え、夜一は続けて言つた。

「何が可笑しい」

「・・・いや済まない。時間だ」

時空が歪むこの感覚。ふと空を見上げて呟いた藍染の声を聞き取り、夜一は叫んでいた。

「離れる、碎蜂ッ!!」

咄嗟のことに碎蜂は聞き返すことはせず、ただ絶対の信頼を寄せる彼女の言葉を信じてそこから飛び退いた。一拍遅れて天から降り注ぐような淡い黄色の光。それは藍染惣右介のみならず、次々と市丸や東仙を飲み込んで言つた。

同時にこじ開けるようにして開いた黒腔^{ガルガンタ}。そこから顔を覗かせるのは巨大な虚、大虚^{メノスグランデ}だ。何体ものそれが発する淡い光は大虚が仲間を助ける時に放つ光。それらが指示示すのは、藍染惣右介はもうあちら側ということだ。

「ああ、言い忘れていたよ。・・・九花巖くん」

「・・・ご指名で?」

光に包まれて宙に浮かんだ藍染に名を呼ばれ、珍しく花巖は嫌悪感を隠そうともせぬ返事をする。満足そうに微笑んだ藍染はのぞき込むように花巖の金色に目を見つめた。奥底まで見透かすような視線に思わず一步後ろへ下がると、

「――私は君を欲している。君の意見など関係ない。九花巖。君は私の元に来る、これは確定事項だ」

「・・・今自分で首を落してくれたら、すぐにもあなたさんの物になりますわ」

「はは。それは難しいな」

ひとしきり笑うと、藍染はかけていた眼鏡を外して髪をかきあげた。今、この瞬間、五番隊隊長藍染惣右介は死んだのだ。あそこにいる男は皆のよく知る藍染惣右介ではない。そう思わせる仕草だった。

「さようなら、死神諸君。そして旅禍の少年達。これからは――」

――私が天に立つ。

斯くして戻る日常

随分、昔の事だ。まだ朽木白哉が少年と呼ばれる時代で、同様に同年代の九花巖も年若かつた頃。それは起こつた。

当時鬼道衆の一隊員だった花巖が誰よりも慕っていた先代の鬼道長『握菱テツサイ』と十二番隊隊長だった『浦原喜助』、そして『四楓院夜一』。この三人が重罪を犯したとして尸魂界を永久追放されたことになつたのだ。

それと同じ頃に、懷いていた他の隊長格も一斉に命を落としたとされ花巖の心は碎け散つた。それはもう、盛大に。

頼れる者は皆ことごとく花巖の前から姿を消して、大鬼道長と副鬼道長を失つた鬼道衆の次に鬼道長として選ばれたのは九花巖。あれよあれよという間にトップに立たされ、最年少鬼道長として舐められたり、いびられたり。だが、その全てを花巖はなんてことの無いようにいつも通り笑つて受け流し、ふらふらと生きていた。空っぽで、枯れた花のようで気持ち悪い。上司が追放されたというのに、何故あんなふうに笑つていられるのか。そんなふうに陰口を叩かれることもしばしば。

それでも、花巖は一滴たりとも涙は流さなかつた。流すことを彼自身が自分に許さなかつた。だから彼は笑う。どうすればいいか分からないから、笑う。悲しいから、笑う。一人だから、独りぼっちだから、寂しいから、笑つた。

——それを良しとしなかつたのが、当時花巖のたつた一人の友人であつた、朽木白哉だつた。

彼はこの世で一人だけになつたような花巖の目が気に入らなくて、笑つてゐるのに泣いているような笑顔が気に入らなくて。彼の笑顔の裏に隠された涙に気づかない周囲の死神に、何より怒りを覚えた。

白哉は花巖を文字通り殴つて叩き直した。青春の1ページと言うにはあまりにも一方的ではあつたが。

ボコボコに殴つて、それでも怒りもしない、泣きもしない花巖に最

後に一発強烈な頭突きをかまして白哉は吠えた。

『私は兄の友人なのだろう』と。

『一人になつたなんて死んでも思うな』と。

『花巻には私がいる』と。

——だから、そう言つてくれた友人がいるから、あれから百数年たつた今でも花巻は独りぼつちなんかじやない。

■ ■ ■

「・・・古い夢だ」

薬品臭いベッドに横たわつた朽木白哉は、ゆっくりと浮上していく意識と共に身体を起こした。渴いた口から零れた啖きはほとんど無意識で、意味はない。ちょっととした確認だ。

「や、おはよう。良く疲れやしたか」

ベッドの隣に置いてある椅子に腰をかけた藍髪の青年は、身じろぎする白哉に気がついてコップに入れた水を差し出した。紛うことなき、九花巻だ。膝に乗せた厚い本をパラパラと捲っている花巻に、白哉は軽く首を回して筋肉をほぐしながら聞いた。

「・・・私はどれくらい寝ていたか」

「一日つてどこでしようかね。ちなみに今は朝の七時。怪我しても体内時計はキツチリしてるようで」

「・・・兄はその間、ずっとここに居たのか」

「やーまあ、ずっとえてえ訳じやねえですけど」

他の子の治療もありますし、と付け足した彼だが、ややバツが悪そな顔をしている辺り時間がある時はこの部屋に来ていたのではないか、と勝手に白哉は予想した。もつともそう言つてみたところでは花巻ははぐらかすだろうから、白哉もこの話はここまでにする。

「あ、それから君の妹さんも阿散井くんも勿論無事でさあ。気になるんなら探してきやしちゃうか」

「いや、いい」

「さいですか。そんじやぼくはこれで」

白哉は膝の上の本をパタンと閉じて、よつこいせと立ち上がる。とした花巻の手を掴んで止めた。一般的に見れば細身に含まれる白哉よりもほつそりとした白い腕だ。

花巻は突然の白哉の奇行に驚いたように、握られた自分の手に目を落とした。

「何を・・・」

「――私は生きている」

傍から見れば頭上に疑問符を浮かべるようなセリフだが、花巻はそれに目を見張った。それから真っ直ぐ見据えてくる白哉の視線に、諦めたようにふつと柔らかく笑う。

白哉は気づいていた。自分が目覚めた時に、安堵したような、花巻のため息に。彼の目元に出来ていた隈に。今握っている手も触れた瞬間震えていることに気がついた。

花巻は身近な者の死を何よりも恐れる。だから、目覚めると分かつていても白哉のベッドから離れることが出来なかつたのだろう。

「兄は、一人ではない」

「・・・・そう思うなんなら、あんまり心配させるようなことしないで貰えませんかね。ぼかあ、あんたさんの姿見た時寿命が縮むかと思いましたわ」

「深手ではなかつた」

「二日も意識失つてよく言いますなあ」

花巻はいつものようにケタケタ笑うと、今度こそヒラリと手を振つて部屋から出ていった。

■ ■ ■

「あつ、花巻さん！朽木隊長どうでしたか？目、覚めてましたか？」

「ああ、ついさつき起きたばつかできあ。今日の昼から彼の分も食事

お願ひ出来ますかい

「了解です！」

大広間に戻ると、パタパタと忙しなくあつちこつちを駆け回つていた少女が声をかけてくる。領いて返すと、ビシツと、謎の敬礼を決めて食堂へとまた駆けていった。落ち着きがないが、花巣にとつては可愛い部下だ。見ていると何となくほっこりする。

藍染惣右介の反乱から、数週間と少し。

怪我をした隊士の半分程が、この鬼道院で治療を受けていた。ちなみに残りの半分のほとんどが十一番隊の者で、当然のことく卯の花が仕切る四番隊で世話をされている。これは卯の花と花巣が話し合った結果の適材適所というやつだ。十一番隊の者は卯の花に頭が上がりないところがあるから、見下している花巣の元によりは四番隊のほうが素直に治療を受けることだろう。よつて花巣が引き受けたのは軽傷の隊士達と、数名の隊長格。そして旅禍達だ。

一番の重傷は白哉だったが、彼も花巣が付きつきりで回道をかけ続けた事により一命を取り留めた。日番谷も傷は深かったのだが、彼に関するでは卯の花が運ぶ際に斬魄刀で治療したため大事には至らず、先日自分の隊舎に戻つたばかりだ。旅禍に関しては言わずもがな、黒崎一護などかなり無理をしたようだったが、あつという間に回復してピンピンしている。明日には現世に帰るらしい。

尸魂界に日常が戻ろうとしていた。

「うんうん。平和が一番ですなあ」

「——同感じやが、すぐにそうも言つてられなくなると思うぞ」

頭の後ろに手を回して、天気も良いし外にでも出るかと花巣が歩き出した時に声はかけられた。今時珍しい古風で特徴的な話し方だ。話し方に関しては花巣も人のことを言えないが。・・・兎も角、聞き覚えのある声だつた。懐かしいようなその声に振り返つてみたものの、後ろにいたのは明るいオレンジ色の髪をした少年と、小柄な黒髪の少女。黒崎一護と朽木ルキアだつたが、どちらも声の主とは違う。視線を下に向けると花巣の足元に、やたら偉そうに佇む黒猫がいた。

「久しいな、花巻。随分立派になりおつて」

「……はあー。お久しぶりで、夜一さん」

花巻は脱力したように、肩を落としてため息をついた。数百年と行方を眩させていて生きてるかどうかも分からなかつたというのに、いきなり現れて当たり前のように声をかけられたのだ。驚きやら安心やらが一周まわつて呆れになる。

半眼でため息をつく花巻の羽織を前足でちよいちよいと引っ搔くと、夜一は言つた。

「こやつらがお主に礼を言いたいと言つていてな。入りづらそうにしていたから儂が連れてきてやつたのじや」

こやつら、というのは一護とルキアの事でいいのだろうか。確認するように二人を見ると、ルキアが頭を下げた。

「助けて頂いて本当にありがとうございました、大鬼道長殿。このご恩はいつか……」

「硬い硬い。『大鬼道長殿』なんて呼ばんでくださいや、堅苦しい。ぼくの名前は九花巻。大鬼道長が名前じやないんで。気軽に花巻って呼んでくださいや」

「……でつ、では花巻殿と。お礼に来るのが遅れて、すみませんでした。その、もつと早く挨拶に来たかつたのですが……鬼道衆の者が『花巻さんは忙しい』の一点張りで……」

「あー……、それは申し訳ない。最近バタバタしてて、あんまり構えてられなかつたからですかね……。困つたもんでさあ」

治療に忙しかつたのは事実だが、少し顔を合わせるくらいの時間も無かつたかと言わればそれは違う。要するに忙しくなつた花巻と鬼道員が接する時間が減つたことで、不貞腐れた彼らが花巻を独占しようとした結果である。おおらかな花巻は、可愛らしいなあで済む話だが、それで迷惑をかけられた者がいるならば良い事ではない。花巻は後で厳しく言つておこうと心に決めた。

「……ちなみに彼にとつての『厳しい』は全く厳しくないことで有名である。

「で、えーと黒崎くんでしたつけ。元気になつたみたいで何よりで

さ。・・・あれだけの傷でもう動けるようになつてゐるが、甚だ不思議でしかないんですが・・・」

「おう。アンタが治してくれたんだろ? サンキューな」

一護はルキアとは違つて碎けた態度で接する。死神という枠に囚われていなからだらうが、何にせよ花巻としては彼のような態度のほうが好感が持てた。

「白哉くんのお見舞い、して行きますかい。ちようどさつき起きましたんで」

「兄様は・・・嫌がらないでしようか・・・つぶべ!」

俯いても「こも」し始めたルキアの頭部を、花巻のチョップが炸裂する。頭を押さえて涙目で花巻を見上げるルキアに呆れた口調で花巻は言つた。

「君たち兄妹は色々勘違いが多すぎでしようや・・・。白哉くんは人より少し愛情の形が分かりにくくて面倒臭いだけで、君のことを大事に思つてまさ。絶対にね」

情けない顔をするルキアの背中を押して、部屋の場所を教える。後は兄妹で勝手に解決するだろう。部外者が立ち入るのは野暮といふものだ。何度か振り向いていたものの病室に向かつたルキアを三人で見守つてから夜一は口を開いた。

「ふむ・・・まあ、積もる話もあるじゃろ。ほら早う茶を出せ。儂等は客じや」

「はいはい。つうか、その身体で飲めるんですかね」

「馬鹿を言え。人の身体に戻るに決まつておるじやろう」

夜一は器用に猫の身体で鼻をひくつかせて笑うと、どろんと人型に戻る。煙が消えて出てきたのは、先程までの黒猫ではなく褐色肌の若い女だ。これが夜一の本当の姿。勿論猫が本体ではない。

ただ一つ問題があるとすれば――、

「服着ろよ!」

「む、持つているように見えるか?」

裸だつた。引き締まつた身体は、しかし出るところは出ていて、瑞々しい色氣に満ちてゐる。胸から腰にかけて緩やかな曲線美は、思春期の一護の顔を真つ赤にさせるくらいには威力があつた。耳までしつかり赤くする一護を見て夜一は満足そうに笑う。しかし服を持つていないので本当だ。

「夜一さん、黒崎くん。焙じ茶と緑茶どつちが……」

「アンタは何平然と茶あ入れようとしてんだ!?」

「え？ ……いや、夜一さんが服着てる時のほうが珍しいんじゃねえですかね」

「どういう認識だよツ！」

茶葉を持ってひよっこりと顔を出した花巻は、鼻血を出して赤面する一護と愉快そうに笑う夜一を見比べて首を傾げた。実際、花巻は女の裸を見て興奮する程若くもないし、その上相手が幼少期に世話をしでもらつた姉のような存在となれば、花巻でなくとも欲情はしないだろう。まあ彼自身が元からマイペースということも関係している。

とりあえず一護にはティッシュを渡して、夜一には花巻の着ていた羽織を渡す。このままだと一護が出血多量で倒れそうだ。そう思つて気遣いで夜一に羽織を着せたのだが、裸に着物だけというのも一護的にはアウトだつたらしく、そのまま逃げるようにして鬼道院から出でいつてしまつた。律儀に「井上達を探してくる」と行先を伝えて。

「……若いですなあ」

「……お主はなんだ、こう……老けたな。いや見た目の話ではなく」「そりやあ、あれから百年ちよつとたちますし。……夜一さんたちが何も言わずにぼくを置いてつて、音沙汰がなくなつてから随分たまつし。見た目は変わらなくとも中身は老けますわ。いや、別に、全然、全く、連絡が無かつたことを怒つてるとか、そんなんじやあねえですけど。ほかあ、物分りがいい手のかからないガキなんで、怒つたりしないんですけど」

「おおう……ナチュラルに不機嫌になるのは相変わらずじやの……」

夜一にとつては耳の痛い話である。つい先日碎蜂ともその事で一悶着あつたばかりだ。夜一も花巻や碎蜂のような妹分弟分を事情も

告げずに置いていったことに関しては、後悔している。だが、真実を話せば二人は十中八九着いて来ただろうから、言えなかつたのだ。

「まあ、置いていつたことは悪かつた。何も教えてやれなかつたのもな。だから儂等がいなかつた時のことも教えてくれ。時間はある、沢山話そう」

ふん、と鼻を鳴らして珍しく不機嫌をありありと顔に貼り付けた花厳の髪をぐしゃぐしゃと乱暴に撫でて、夜一は豪快に笑つた。

空のベッド

「——そういう訳で、花巻さん。頼みますよ」
「はあ、まあ……。それが護廷十三隊そちゅうたいの見解なら」

昼下がり。四番隊舎の応接室で、花巻は煎茶を喉に流し込んで曖昧に頷いた。

尸魂界に一時的に平穏が戻ったとはいえ一定数の負傷者がいる以上、治療部隊である四番隊と鬼道衆は日夜慌しい。

そんな中、両部隊の長達がどうして白昼堂々茶会を開いているかといえば理由はただ一つで。今回最も大きな被害を受けたと言つてもおかしくない、五番隊副隊長『雛森桃』の治療を四番隊から九花巻率いる鬼道衆へ受け渡そう、というものだつた。

治療、といえど、雛森の身体に怪我はなく卯ノ花が言つているのはつまるところ彼女の心のケアのことである。

しかしながら、当然花巻にカウンセリングの真似事など出来る訳がない。彼に出来るのはあくまで、雛森を『護廷十三隊』ではない『鬼道衆』という別の環境を与えることだけだ。そしてそれこそが、護廷十三隊……四番隊隊長卯ノ花烈の目的だつた。

『雛森副隊長は、眞面目で責任感の強い方です。五番隊舎に戻せば、きっと今までの分を挽回しようと、より自分を追い詰めるに違い無いでしょう。……ですが身体の傷は治りましたが、心はまだ回復しきつていません。彼女に必要なのは時間と環境です。ゆっくり時間をかけて、心を休ませてあげなくてはなりません。——そして、それは私達にはできない事です』

花巻は話を聞いているうちに、口の中の最中がだんだん苦くなつて

いくように感じた。荷が重い。重すぎる。

食べ終わつた和菓子の包み紙を綺麗に折りたたんで、ううんと唸つているとニッコリ微笑んだ卯ノ花と目が合つた。

『お願い、出来ますか？』

荷が重いです、そう言いかけた口をぎゅっと結んで花厳はこくこく頷いた。長いものに巻かれろ、長く生きるためには必要な知恵である。決してビビつた訳じやない。本当に。

そうして話は冒頭に戻る。

頼まれたからには花厳にはそれを実行しなければならない義務があるし、さて雛森を鬼道院に連れていくと腰を上げかけた時に、卯ノ花に声をかけられた。

「——それはそうとして、花厳さん。貴方は……彼らと共に現世に行かなくて宜しかつたのですか？」

花厳に気を使つてゐるのか、その口調はいつも以上に優しい。暖かい色をした卯ノ花の眼差しを正面から受けて、花厳は小さく笑う。

先日長らく行方を眩ませていた四楓院夜一が生きていたことで、同様に浦原喜助、そして先代鬼道長『握菱テツサイ』の生存も確認された。会いに行かなくて良いのかと、そう言いたいのだろう。監視付き、数日で戻ること、幾つか条件はあるものの新たに入れ替わつた四十六室から、既にその許可は下りていた。

百年前、罪人として尸魂界から永久追放された彼ら……特に握菱テツサイは花厳の親代わりであつたことを卯ノ花は知つてゐるのだ。会いたいか、会いたくないかで言えば勿論会いたい。けれど今の花嚴は鬼道衆という集団の長で、あの子達を守らなくてはならない責務がある。任務を与えられて現世に赴くような事があれば会いに行くだろうが、鬼道衆を放置してまで彼の元に行く気はなかつた。

「四番隊ほどではないとはいって、鬼道衆も今はそれなりに忙しいんで。今現世に行つたら、鬼道長として自覚が足りないってテツサイさんに怒られちまいまさあ」

正座で長時間彼の説教を受けた記憶が蘇つて、花巻は苦笑混じりに言つた。

テツサイの説教は長くくどい上に、その殆どが正論過ぎて反論出来ない。あの巨体に目の前で仁王立ちされて怒られる恐怖といつたらないのだ。

「驚きました。意外に吹つ切れているのですね」

「まあ、あれだけ憎かつた四十六室も死んじましたしね。時間が解決することも、あるんでしょうや。ぼくがそうだつたんだから、きつと雛森ちゃんも」

勿論それだけではないけれど。花巻には支えてくれる友がいたから。彼のお陰でもあるのだ。

——時間と雛森の周囲の者が、彼女の冷え固まつた心を少しでも溶かせるといい、そう思つていた。



——そう、思つていたのだけれど。

「……こりやあ、想像以上に根が深い問題というかなんというか」

四番隊舎の一室で、空っぽの白いベッドを前にして花巻は呆然と呟いた。

手が空いていた四番隊の隊員に案内された病室は他と違つて一人

部屋で、ぽつんと置いてあるベッドがやけに寂しい。窓際に飾られた花が唯一部屋を色づけている。

けれど、部屋の簡素さは今は全く関係なく。問題というのは、この部屋にいなくてはならない存在が何処にもいないということだつた。もしかしたら、と思ってベッドの下をのぞき込んで見たけれど、当然そこにも彼女はいなかつた。そらそら、自分で自分に突つ込んで、しゃがみ込んだまま・・・俗に言うヤンキー座りで花巻は頭を抱えた。

「あー、えーっと、この場合ほかあどうすりやいいんでしようや」

もう一度ベッドを見つめたけれど、やつぱりそこには誰もいない。

——この部屋で療養中の筈の、雛森桃がいないのだ。

まずいことになつた。非常にまずいことになつた。

部屋が荒れた様子はないし、誰かに無理やり連れていかれたり、殺害された可能性は皆無に近い。だから考えられるのは自らの足でここを抜け出したということだけだ。

となると、より面倒くさくなる。自分の意思で抜け出したのなら、仮に彼女の姿を見つけたとしても素直にこちらに戻らないだろうから。

「力技で連れ戻すか、上手く説得するか・・・どっちも自信がないですなあ」

どこへ向かつたかはおおよそ予想がつく。

探しに行くべきか、と花巻は重い腰を上げて鬼道衆の者に伝令神機で『まだ帰れない』という内容を伝えた。

——なお、鬼道衆からの返信は『迷子ですか』だったので、彼らの中での花巻のポジションについて後でしつかりと話し合う必要があると思う。